災害 -地震-
帯広市で想定される地震

地震は発生場所によって「断層型地震」と「海溝型地震」があります。それぞれ発生確率は違いますが、帯広市に大きな揺れをもたらす可能性があります。

断層型地震

帯広市内にも、十勝平野断層帯主部を構成する緑が丘断層や途別川断層、以平断層などの活断層が存在していると言われており、比較的狭い範囲で大きな被害が出る内陸型地震の発生に備えることが必要です。

活断層による地震の被害が及ぶ範囲は、活断層線の上部だけではなく、活断層の地下での広がりや周辺の地盤が大きく影響を受けるため、被害が広範囲に生じます。

海溝型地震

日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震が発生した場合、沿岸部では、津波による甚大な被害のほか、帯広市でも大きな揺れによる被害が発生する可能性があります。

巨大地震の発生確率

●断層型地震

十勝平野断層帯主部を震源とする地震
（帯広市の地震の被害想定モデル）

・３０年以内にマグニチュード８程度の地震が発生する確率は0.1～0.2％
（出典：地震調査研究推進本部 地震調査委員会　令和4年1月）

・帯広市の想定最大震度は震度７
（出典：北海道地震被害想定 平成30年2月）

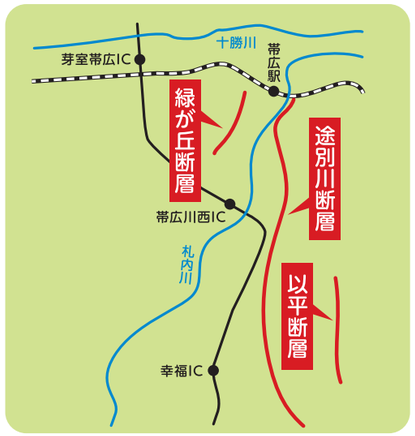
●海溝型地震

日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震

・３０年以内にマグニチュード８.８程度以上の地震が発生する確率は7～４０％
（出典：地震調査研究推進本部 地震調査委員会　令和5年1月）

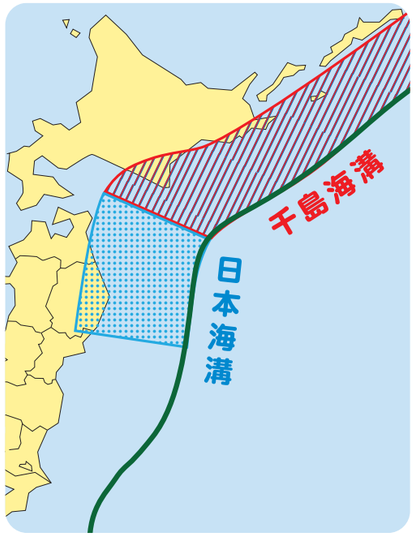
・帯広市の想定最大震度は震度６弱
（出典：日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデル検討会　令和4年3月）

●帯広市の活断層



活断層は「都市圏活断層図「帯広」(平成14年10月)：国土地理院」に基づく

●想定される巨大地震の震源域



災害 -地震-
地震の揺れと想定される被害

地震の揺れが大きくなると、高いところからの落下物によるけがや歩行（移動）も困難になるおそれがあります。頭を隠すなどの身を守る行動が最も大切です。

地震の震度（気象庁震度階級）

震度0
人は揺れを感じない。

震度1
屋内で静かにしている人の中には揺れをわずかに感じる人がいる。

震度2
屋内で静かにしている人の大半が揺れを感じる。

震度3
屋内にいる人のほとんどが揺れを感じる。

震度4

- ●ほとんどの人が驚く。
- ●眠っている人のほとんどが目を覚ます。
- ●電灯などの吊り下げ物は大きく揺れる。
- ●座りの悪い置き物が倒れることがある。

震度5弱

- ●大半の人が恐怖を覚え、物につかまりたいと感じる。
- ●棚にある食器類や本が落ちることがある。
- ●固定していない家具が移動することがあり、不安定なものは倒れることがある。

震度5強

- ●物につかまらないと歩くことが難しい。
- ●棚にある食器類や本で落ちるものが多くなる。
- ●固定していない家具が倒れることがある。
- ●補強されていないブロック塀が倒れることがある。

震度6弱

- ●立っていることが困難になる。
- ●固定していない家具の大半が移動し、倒れるものもある。ドアが開かなくなることがある。
- ●壁のタイルや窓ガラスが破損、落下することがある。
- ●耐震性の低い木造建物は、傾いたりすることがある。

震度6強

- ●はわないと動くことができない。飛ばされることもある。
- ●固定していない家具のほとんどが移動し、倒れるものが多くなる。
- ●耐震性の低い木造建物は、傾くものや、倒れるものが多くなる。
- ●大きな地割れが生じたり、大規模な地すべりや山体の崩壊が発生することがある。

震度7

- ●耐震性の低い木造建物は、傾くものや、倒れるものがさらに多くなる。
- ●耐震性の高い木造建物でも、まれに傾くことがある。
- ●耐震性の低い鉄筋コンクリート造の建物では、倒れるものが多くなる。

上記は、ある震度の観測時に、その周辺で発生する現象や被害の目安を示しています。

災害 -地震-
地震発生時の行動を考えましょう

地震はいつ起こるかわかりません。地震が発生した時に命を守る行動をとれるよう、日頃からイメージしておくことが大切です。

発生時の行動

まずは身を守る行動を！！

- 緊急地震速報や、大きな揺れがあった時は、身の安全を最優先に行動しましょう。
- 丈夫なテーブルの下や、物が「落ちてこない」「倒れてこない」場所に移動し、揺れが収まるまで様子を見ましょう。

発生直後（揺れが収まった後）の行動

◎火元の確認

- 火を使っている時は、揺れが収まってから、あわてずに火の始末をしましょう。
- 出火していたら落ち着いて消火しましょう。

◎あわてた行動はけがのもと

- 屋内では、転倒や落下した家具類、割れたガラスの破片などに注意しましょう。
- 窓ガラス、看板などが落ちてくるので外に飛び出さないようにしましょう。

◎出口を確保

- 揺れが収まったことを確認してから、ドアや窓を開けて、避難ができるように出口を確保しましょう。

◎危険な場所に近寄らない

- 屋外で大きな揺れを感じたら、ブロック塀や電柱、自動販売機など、倒れるおそれがあるものには近づかないようにしましょう。

発生後の行動

避難するかどうかの判断を！！

火災などのおそれがなく、家の耐震性に問題がなければ、まずは在宅での避難生活を考えましょう。自宅での避難生活に備え、食料や水などを備蓄しておきましょう。
※家庭での備蓄は8ページをご覧ください。

避難が必要な場合

家屋が倒壊するおそれや、火災の発生、土砂災害のおそれがある場合は、状況に応じてより安全な場所に避難しましょう。

◎正しい情報の把握に努めましょう

- 災害時にはデマやうわさなど不確実な情報が出回りやすいのでラジオやテレビ、行政機関などから信頼できる情報を入手しましょう。

◎避難の前に安全確認をしましょう

- 避難が必要になった時は、電気のブレーカーを切り、ガスの元栓を閉めて避難しましょう。

停電への備え

停電が発生するとさまざまな支障が生じますが、日頃からの備えがあれば、多少の不便があっても自宅で過ごすことができます。停電への備えを確認しましょう。

◎懐中電灯や足元灯など照明器具の備え

夜間、出入口や床の段差、ガラスの破片が見えないなど、周囲の状況が確認できないと危険です。懐中電灯や足元灯を準備しましょう。

◎モバイルバッテリーや電池など電源の備え

スマートフォンや携帯電話は、情報収集や連絡手段として有効です。モバイルバッテリーや電池、車から電源をとるためのコードなどを準備しましょう。

◎カセットコンロなど調理器具の備え

IH調理器は、停電時は使えません。カセットコンロ（予備のカセットボンベ）などを準備しましょう。

◎ポータブルストーブなど暖房器具の備え

電気式の給湯・暖房設備は、停電時は使えません。電池式のポータブルストーブなどを準備しましょう。

◎車の燃料の備え

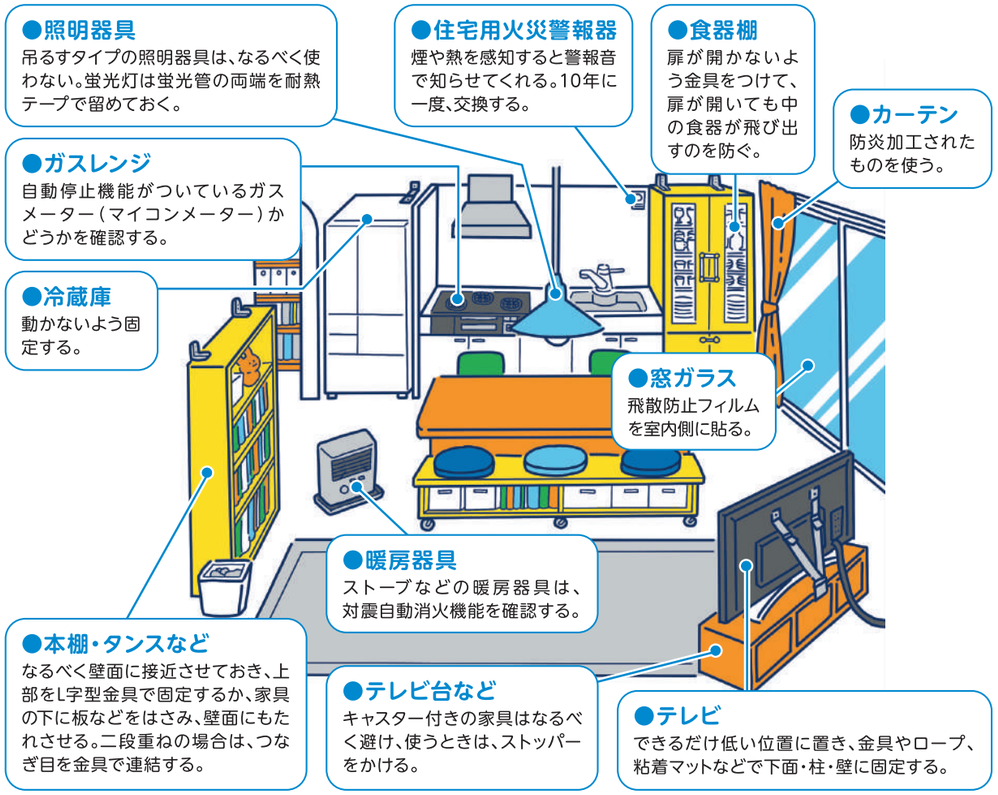
車では、テレビやラジオなどの視聴や、シガーソケットからの電源確保、暖房など、さまざまな用途に活用することができます。日頃から車の燃料を補給しておくことを心がけましょう。

最新の停電情報は、北海道電力ネットワークのホームページまたは、LINEで確認することができます。

LINE　ホームページ

災害 -地震-
家の中の地震対策

地震による家財の転倒や落下などは、被害を拡大させ、室内の散乱は、逃げ遅れの原因にもつながります。家具などの配置や固定を確認しましょう。



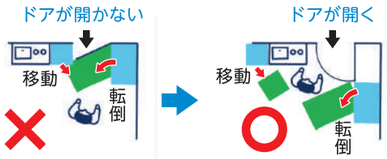
電気火災対策には「感電ブレーカー」が効果的

地震の際には、転倒した電気ストーブや損傷した電気コードのショートなどが原因の火災の危険性が高くなります。感電ブレーカーは、地震を感知すると自動的にブレーカーを落として電気を止めます。

このような工夫で、家の中の事故を防げます

就寝中に家具の下敷きにならないよう、家具が倒れても影響のない場所にベッドを配置する。

家具は転倒や移動をしても、出入口や通路をふさぐことがないような場所に配置する。



〈上から見た図〉

災害 -地震-
外出時の安全確保

外出時に地震が発生したら、どのように身を守れるでしょうか。起こり得る危険と取るべき行動をあらかじめ想定しておきましょう。

屋内の場合

◎スーパー・デパート

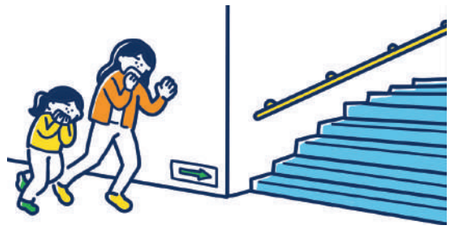
- ●ショーケースの転倒、商品の落下に注意しましょう。
- ●バッグなどで頭部を保護し、柱や壁際に身を寄せましょう。
- ●あわてて出口に移動しないで、店員の指示に従って冷静に行動しましょう。

◎職場・オフィス

- ●机の下などに身を隠しましょう。
- ●カバンなどで頭部を保護しましょう。
- ●本棚やOA機器などの移動や転倒に注意しましょう。

◎地下街

- ●壁面や太い柱に身を寄せ、揺れが収まるのを待ちましょう。
- ●火災が発生したら、ハンカチなどで鼻と口を覆い、体を低くして煙の流れる方向へ壁を伝って逃げましょう。



◎劇場・ホール

- ●バッグなどで頭部を保護しましょう。
- ●イスとイスの間にしゃがみ、身を伏せましょう。
- ●あわてて出口に移動しないで、係員の指示に従って冷静に行動しましょう。

◎エレベーターの中

- ●最寄りの階に停止させ、停止した階で降りましょう。
- ●閉じ込められた場合は、非常ボタンやインターホンで外部と連絡をとり、救出を待ちましょう。

◎学校

- ●先生や校内放送の指示に従いましょう。
- ●教室にいる時は、机の下にもぐり、頭部を保護しましょう。
- ●本棚や窓から離れ、安全な場所に移動しましょう。屋外にいる時は、そのまま屋外にとどまりましょう。

屋外の場合

◎住宅街、商店街

- 手荷物などで頭部を守り、できるだけ広場へ移動しましょう。
- ガラスや看板などの落下物に注意しましょう。
- 自動販売機の転倒や壁の倒壊に注意しましょう。
- ブロック塀や門柱から離れましょう。
- 建物の周りや狭い路地には近づかないようにしましょう。

◎車の運転中

- 地震を感じたらハザードランプを点灯し、周りに注意を促しながら徐々に速度を落とし、道路の左側に寄せてエンジンを停止しましょう。
- 車を離れるときは必ずキーをつけたままにし、ドアロックはしないようにしましょう。

◎電車やバスの中

- 停車の衝撃に備えてつり革や手すりにしっかりとつかまりましょう。
- 勝手に外に出たり、窓から飛び出さないようにしましょう。
- 係員の指示に従って行動しましょう。

◎海岸、がけ付近

- すぐにその場を離れ、安全な場所、あるいはできるだけ高い所に避難しましょう。
- テレビやラジオ、携帯電話などから津波警報が発表されていないか確認しましょう。
- 津波は繰り返し襲ってきます。後からの津波の方が高くなることもあるので、警報の解除まで海岸や川には近づかないようにしましょう。

緊急地震速報について

- 緊急地震速報は、地震発生直後に、各地での強い揺れの到達時刻や震度を予想し、可能な限り素早く知らせる情報のことです。
- 気象庁が緊急地震速報を発表してから強い揺れが到達するまでの時間は、数秒から長くても数十秒程度しかありません。この短い間に身の安全を守ることを最優先に行動しましょう。
- 震源に近い場所では、緊急地震速報が強い揺れの到達までに間に合わない場合があります。
- 緊急地震速報は、「最大震度５弱以上」または「長周期地震動階級3以上」を予想した時に、「震度４以上」または「長周期地震動階級3以上」を予想した地域に、テレビやラジオなどを通じて周知されます。

災害 -地震-

北海道・三陸沖後発地震注意情報について

北海道の根室沖から東北地方の三陸沖の巨大地震の想定震源域と、その外側のエリアで、モーメントマグニチュード※7.0以上の地震が発生した場合に発表されます。

後発地震注意情報が発表されたら・・・

「大きな地震が発生する確率が、普段より相対的に高まっている」ことを呼びかけるもので、必ず大きな地震が発生するということではありません。

事前に避難する必要はありませんが、巨大地震の発生への注意と備えを徹底しましょう。

1週間程度は「いつもの備え」から一段階上げた備えをしましょう

◎いつもの備え

- 家具類の転倒防止
- 安全な避難場所、避難経路を確認する
- 避難に必要な食料などの備蓄
- 家族との連絡手段を確認する　など

◎一段階上げた対応

- 屋内の安全な場所や部屋で過ごす
- 非常持ち出し品を持ち出しやすい場所に置いておく
- 災害の危険性がある場所に近寄らない　など

⚠ 巨大地震はいつ発生するか分かりません　常に備えを！！ ⚠

後発地震は必ず発生するものではありませんが、巨大地震はいつ発生してもおかしくはありません。地震に対しては、①揺れている時は安全な場所で身を守る　②揺れが収まってから避難 を徹底し、日頃から家具の固定や高い所に物を置かないなどの対策がとても大切です。

後発地震とは

先に発生した地震を「先発地震」、これ以降に引き続いて発生する地震を「後発地震」と呼びます。余震も後発地震に含まれますが、一般的に余震は先発地震より規模が小さい地震、後発地震は先発地震より規模が大きい地震を指します。

※モーメントマグニチュード

一般的に地震の規模を示す際に使われるマグニチュードは、地震計で測定しているのに対し、モーメントマグニチュードは、震源の岩盤の面積とずれの大きさ、岩盤の硬さから算出されます。

災害 -地震-
長周期地震動

長周期地震動が発生すると、高いビルの高層階ほど「大きく」「長く」揺れが続きます。事前に家具などを固定するなどの対策をし、長周期地震動にも備えましょう。

長周期地震動について

大きな地震が発生した時に生じる、周期（1往復の時間）が長い揺れを「長周期地震動」と言います。

長周期地震動は揺れている時間が長いため、遠く離れた場所でも揺れを感じることがあり、特に高いビルなどでは、揺れが大きくなることがあります。通常、地震が発生した時は、震度で表しますが、長周期地震動の揺れの大きさは、長周期地震動階級という4つの段階で表します。

※14～15階建て以上の建物や、免震構造の建物で固有周期（1.5秒～8.0秒程度）が影響を受けると言われています。

高いビルの高層階は大きく
長時間にわたり揺れます

想定される被害

- ●高いビルでは、家具類の転倒や落下、移動などが想定されます。
- ●これまでの事例では、天井の落下やスプリンクラーの故障、エレベーターの停止などが発生しています。
- ●平成23年（2011年）の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）の時には、地震の発生地点から遠く離れた東京でも高いビルが大きく揺れ、被害が発生しました。

長周期地震動階級

階級1
●室内にいるほとんどの人が揺れを感じます。照明やブラインドなど、部屋にぶら下がっているものは大きく揺れます。

階級2
●何か支えがないと動くことが難しくなってしまう状態です。
●キャスター付きの家具類などがわずかに動くほか、棚にある食器類、書棚の本などは落下してしまうことがあります。

階級3
●立っていることが困難になります。
●キャスター付きの家具類などが大きく動くほか、固定していない家具が移動することがあり、不安定なものが倒れることがあります。

階級4
●立っていることができず、はわないと動くことができない状態です。
●キャスター付きの家具類などが激しく動き、転倒するものがあるほか、固定していない家具の大半が移動し倒れるものもあります。

災害
マンション・アパートの防災

マンションやアパートは、高層であったり玄関や通路を共用するなど、戸建て住宅とは違った災害への備えが必要となります。

マンション・アパート特有の被害

●高層階の揺れ
高層階は、低層階よりも揺れが大きくなりやすいため注意が必要です。揺れを感じたら、机やテーブルの下などで揺れが収まるのを待ちましょう。

●停電の影響
停電時には、生活に欠かせないエレベーターやオートロック玄関などの設備が使用できなくなることがあります。

緊急時の使用方法を確認しておきましょう。

●給排水設備の破損
配管や受水槽が破損すると、水道の断水の発生や、トイレやお風呂などの排水ができなくなる場合があります。

飲料水や携帯用トイレなどを備えておきましょう。

災害への備え

●避難経路の確認
マンション・アパートでは、避難のための非常口や非常階段、避難はしごなどが整備されている場合があります。
それぞれの場所と使用方法を確認しておきましょう。

●共用部の避難スペース
階段や通路などはもちろん、ベランダも緊急時の避難経路となり得ます。
自分自身や、他の居住者の安全確保のためにも、共用部には避難のさまたげになるようなものを置かないようにし、避難経路の確保をしておきましょう。

●エレベーターは使用しない
地震時は、エレベーター内に閉じ込められてしまう危険性があるため、非常階段などで避難しましょう。

エレベーターの中で地震があったら全てのフロアのボタンを押して一番近いフロアで降りましょう。

万が一閉じ込められてしまった場合は、非常電話ボタンを押し、管理者と連絡を取りましょう。

防災チェック

- ☐ 非常口や非常階段、避難はしごなどの場所（使用方法）を確認している
- ☐ 階段や通路、ベランダなどの共用スペースに避難のさまたげになるようなものを置いていない
- ☐ 水道やエレベーター、オートロック玄関などの設備の緊急連絡先を把握している

災害 -風水害-
風水害から身を守ろう

風水害に備えるには、気象情報を把握して早めに備え、速やかな行動をとることが基本です。日頃から、最新の気象情報を確認するように心がけましょう。

雨の強さと降り方

1時間雨量の目安

10～20mm	20～30mm	30～50mm	50～80mm	80mm以上
やや強い雨	強い雨	激しい雨	非常に激しい雨	猛烈な雨
ザーザーと降る。雨の音で話し声が良く聞き取れない。	どしゃ降り。傘をさしていても濡れる。	バケツをひっくり返したように降る。道路が川のようになる。	滝のように降る。傘は全く役に立たなくなる。	息苦しくなるような圧迫感があり、恐怖を感じる。

風の強さと吹き方

平均風速の目安

10～15m/秒	15～20m/秒	20～30m/秒	30～35m/秒	35m/秒以上
やや強い風	強い風	非常に強い風	猛烈な風	猛烈な風
風に向かって歩きにくい。傘がさせない。	風に向かって歩けなくなり、転倒する人もでる。電線が鳴り始め、看板やトタン板が外れ始める。	何かにつかまっていないと立っていられない。細い木の幹が折れたり、看板が落下・飛散する。	屋外での行動は極めて危険。走行中のトラックが横転する。	多くの樹木が倒れ、電柱や街灯で倒れるものがある。

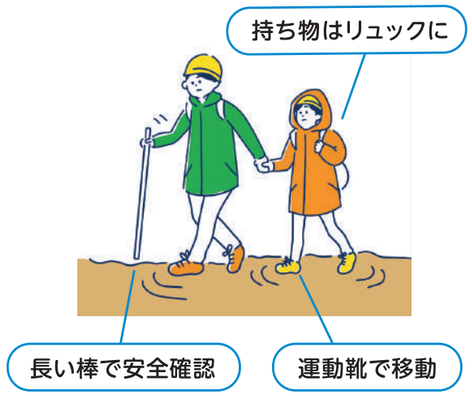
おおよその時速 ～約50km/h ～約70km/h ～約110km/h ～約125km/h

避難のポイント

浸水が始まってから避難することはとても危険です。浸水前の早い段階で安全な場所に避難しましょう。

◎持ち物・服装

- 動きやすい服装で、持ち物はリュックにいれ、両手を自由にします。
- 長靴は水が入ると動きずらくなるため、動きやすい運動靴をはきます。
- 浸水時は、水の濁りで足元が見えないため、側溝やマンホールなどを長い棒で確認しながら移動します。
- 夜間の避難は危険なため、明るいうちに避難をしましょう。



●歩行が困難になる水深

水深が膝くらいになると大人でも歩くことが困難になり、50cm以上の水深になった時の避難は危険です。

●川には近づかない

上流域の降雨により、河川の水位が急激に上昇することがあります。河川の増水が心配になっても、川の様子を見に行くことは非常に危険なのでやめましょう。

●車で避難はしない

一般的に、30cm以上の水深では車の走行が困難となり、50cm以上では車が浮いたり、車内に閉じ込められたりするなど、車での避難は危険です。

危険な場所

●河川や用水路

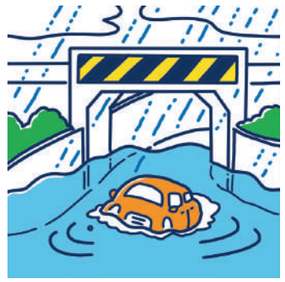
激しい水の流れが発生することがあるので、絶対に近づかないようにしましょう。

●地下空間

地上の様子が分からず逃げ遅れる可能性があります。また、地上が冠水すると一気に水が流れ込み、水圧で部屋のドアが開かなくなる危険性があります。

●アンダーパス

鉄道や道路の下を横断する場所（アンダーパス）は、降雨時に大きな水溜りになる可能性があります。



災害 -風水害-
土砂災害から身を守ろう

土砂災害は、大雨や地震などの発生に伴い、山やがけなどの斜面で突発的に発生し、大きな被害をもたらす災害です。土砂災害に備えるための知識を身につけましょう。

土砂災害の種類と前兆現象

がけ崩れ（急傾斜地の崩壊）

斜面の地表に近い部分が、雨水の浸透や地震などでゆるみ、突然崩れ落ちる現象。

土石流

山腹や川底の石、土砂が長雨や集中豪雨などによって一気に押し流される現象。

地すべり

斜面の一部あるいは全部が地下水の影響と重力によってゆっくりと斜面下方に移動する現象。

前兆現象

がけに亀裂が入る

山鳴りが聞こえる

山脈や地面に
ひび割れができる

小石が落ちてくる

川の水が急に濁り、
流木が流れてくる

沢や井戸の水が濁る

水が湧き出る

雨が降り続いているのに
川の水位が下がる

斜面や地面から
水が吹き出る

上記は、前兆現象の一例です。すべての場合において必ず起きるものではありません。
普段と異なる現象が発生し、少しでも身に危険を感じたら避難するようにしましょう。

土砂災害警戒区域を確認しましょう

土砂災害のおそれがある区域について、北海道が「土砂災害警戒区域（イエローゾーン）」と「土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）」を指定しています。

●土砂災害警戒区域（イエローゾーン）

土砂災害が発生した場合に、住民等の生命又は身体に危害が生じるおそれがあると認められる区域で、警戒避難体制を特に整備すべき土地の区域

●土砂災害特別警戒区域（レッドゾーン）

土砂災害が発生した場合に、建築物の損壊が生じ、住民等の生命又は身体に著しい危害が生じるおそれがあると認められ、一定の開発行為の制限及び建築物の構造規制などが行われる区域

帯広市で指定されている土砂災害警戒区域及び土砂災害特別警戒区域は、8箇所です。（55ページ参照）

土砂災害から身を守るポイント

前兆現象に注意

土砂災害の発生前には、音や臭いなどの前兆現象が発生することがあります。前兆現象を確認した場合は、避難情報が出ていなくても、速やかに避難しましょう。

警戒区域の付近には近づかない

避難するときは、警戒区域に近づかないようにしましょう。
また、近くの警戒区域の場所を普段から確認しておきましょう。

早めの避難

土砂災害は、大きな被害をもたらす可能性があります。避難情報が出ていない場合でも、不安を感じたら、警戒区域から離れた場所に避難しましょう。

土砂災害警戒情報

土砂災害警戒情報は、降雨による土砂災害の危険が高まった時に、自治体が避難指示を発令する判断や住民が自主避難をする判断の参考となるよう、北海道と気象庁が共同で発表するものです。土砂災害警戒情報が発表され、近くに警戒区域がある場合、いつでも避難がとれるように備えをしておきましょう。

土砂災害警戒情報が発表された場合、気象庁の「土砂キキクル」で土砂災害の危険が高まっている地域の詳細を確認することができます。
「土砂キキクル」では、1㎞四方の領域ごとに危険度を5段階の色で表示がされ、10分毎に更新されています。
土砂災害警戒情報が発表された時は、「土砂キキクル」を確認しましょう。

土砂キキクル

災害 -風水害-
避難のタイミング

水害や土砂災害は、発生するリスクの高まりを気象情報などで把握することができ、避難するタイミングは５段階の「警戒レベル」で示されます。

浸水想定や土砂災害警戒区域を確認しましょう

浸水想定区域とは、河川の氾濫などにより浸水が予想される区域のことです。また、土砂災害警戒区域（35ページ参照）とは、土砂災害が発生した場合に、住民の生命または身体に危害が生じるおそれがあると認められる区域です。

本ガイド58ページ以降の防災マップで、自分の住んでいる地域や、行動する範囲の浸水想定や土砂災害の危険性を確認しておきましょう。

警戒レベルで避難のタイミングをお知らせします

水害や土砂災害の危険性について、５段階の「警戒レベル」で危険度をお知らせします。

レベル3の高齢者等避難や、レベル4の避難指示などの避難情報は、気象庁などから発表される警戒レベル相当情報や、日没時間なども勘案して帯広市が発令します。

なお、危険を感じる場合は迷わず避難行動をとってください。

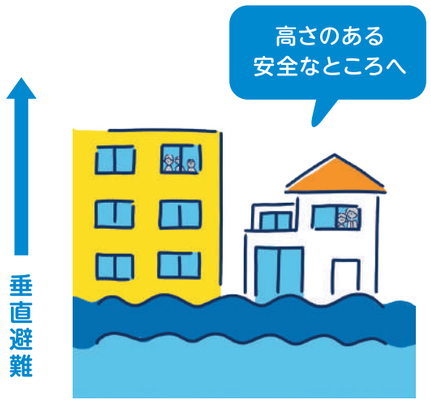
水平（立退き）避難と垂直避難

水平（立退き）避難

浸水のおそれがない地域に避難することです。水害が発生する前に避難を完了させることが最も大切です。

垂直避難

急激な降雨や浸水により、水平（立退き）避難が困難な場合は、浸水などによる倒壊のおそれがない自宅や近隣建物の上階に避難しましょう。



警戒レベルを把握し緊急事態に備えましょう

帯広市が発令する避難情報や防災機関が発表する情報をもとに、早めに適切な避難行動を！

●警戒レベルと避難行動

警戒レベル 1	警戒レベル 2	警戒レベル 3	警戒レベル 4	警戒レベル 5
早期注意情報	注意報（洪水・大雨）	避難情報 高齢者等避難	避難情報 避難指示	避難情報 緊急安全確保
今後気象状況悪化のおそれ	気象状況悪化	災害のおそれあり	災害のおそれ高い	災害発生又は切迫
災害への心構えを高める テレビやラジオ、インターネットなどで気象や河川などの情報を確認して備えてください。	自らの避難行動を確認する ハザードマップやキキクル（危険度分布）などで災害が想定される場所や避難場所などを確認してください。	危険な場所から高齢者等は避難 移動に時間がかかる高齢者や障害のある方、避難行動にお手伝いが必要な方は避難してください。	危険な場所から全員避難 危険な場所にいる人は、全員、安全な場所に避難する必要があります。 ※避難先は避難所や安全な親戚・知人宅、宿泊施設、公園や広場など	命の危険 直ちに安全確保！ 災害が発生している可能性があり、避難所などへの移動は危険な状況です。その時点でいる場所よりも安全な場所（建物の2階や斜面の反対側など）で身の安全を確保してください。

世帯構成に応じて避難行動開始！

⚠ 警戒レベル4までに危険な場所から全員避難！ ⚠

帯広市が発令を判断

帯広市が「警戒レベル相当情報」やその後の気象の見通し、河川の水位の状況などに加え、日没時刻などを総合的に勘案した上で「避難指示」や「高齢者等避難」の発令を判断します。

●防災関係機関が発表する情報　（市民が自ら行動する際の判断に参考となる防災気象情報）

警戒レベル		1 相当	2 相当	3 相当	4 相当	5 相当
洪水に関する情報	水位情報がある場合		氾濫注意情報	氾濫警戒情報	氾濫危険情報	氾濫発生情報
洪水に関する情報	水位情報がない場合			洪水警報		大雨特別警報（浸水害）
土砂災害に関する情報				大雨警報（土砂災害）	土砂災害警戒情報	大雨特別警報（土砂災害）

⚠
・警戒レベル５「緊急安全確保」は、必ず発令されるものではありません。
・避難情報が発令されていなくても、危険を感じた場合は迷わず避難してください。

災害 -火災-
火災に備えよう

災害時に火災が発生すると、被害が拡大します。家庭から火事を出さないために日頃から火災について考えておきましょう。

火災への備え

1.
火災発生時の逃げ遅れを防止するため、住宅用火災警報器を設置する。

2.

火災の拡大を防ぐために、じゅうたんやカーテン類は防炎品を使用する。

3.
ストーブを使用する時は、燃えやすいものを近づけない。

4.
被害を最小限に防ぐため、消火器を設置する。

※火災から命を守るため、全ての住宅に住宅用火災警報器の設置が義務化されています。設置後は、定期的に作動確認しましょう。

帯広消防署指導課 TEL 0155-26-9131

119番通報のポイント

●119番通報は安全を確保してから行う。
●落ち着いて、火災やけが・病人などの状況をできるだけ詳しく伝える。

「火事」か「救急」か	場所を正確に	災害の内容	通報者の名前を伝える
火事か救急かをはっきりと伝える	市町村名・住所の他に目標物なども伝える	火災の時は、何が燃えているのか、逃げ遅れた人、けがの有無を伝える	通報後、携帯電話での通報の場合は電源を切らずに、現場近くの安全な場所にいてください

初期消火のポイント

1. 早く知らせる
●「火事だ！」と大声で叫び、周囲に助けを求める。
●小さな火事だと思っても、早く119番に通報する。

2. 早く消火する
●水や消火器（なければ毛布や座布団）を活用して一刻も早く消火する。
●てんぷら油火災では絶対に水をかけてはいけない（鍋のフタを被せると有効）。

3. 早く逃げる
●天井に火が燃え移ると、火災は一気に拡大するので速やかに避難する。

⚠ あくまでも逃げることが優先です！決して無理はしない！

火災時の避難のポイント

1. 火災の煙には有毒ガスが多く含まれています。煙の中を逃げる時は、煙を吸わないように姿勢を低く。
2. 避難する時、燃えている部屋のドアを閉め、延焼や煙の拡大を遅らせる。
3. 服装や持ち物にこだわらずできるだけ早く避難する。
4. すぐに避難できるように、住宅用火災警報器を設置のうえ維持管理をする。廊下や階段には物を置かない。
5. 逃げ遅れた人がいる時は、近くの消防隊にすぐに知らせる。

災害 -その他の災害-
暴風雪

冬期間、低気圧の通過などによる暴風雪によって、停電や遭難などの災害が発生するおそれがあります。事前に気象情報を把握して、早めの備えをしておくことが大切です。

暴風雪に遭遇した場合

雪による視界不良（ホワイトアウト）のため方向感覚がなくなり、自分の位置が分からなくなることや吹きだまりが発生する場合があります。

◎屋外にいる場合
●スーパーやコンビニ、人家など建物の中の安全な場所に移動して天気の回復を待ちましょう。
●歩行中は風で飛ばされてくる物に注意しましょう。
●重ね着や肌の露出を少なくし、体温が低下しないようにしましょう。

◎家の中にいる場合
●FF式暖房機などの給排気口が吹きだまりで塞がれていると、一酸化炭素中毒を起こす可能性があるため、給排気口が塞がれていないか確認しましょう。
●出入口を確保するため、吹きだまりの状況を見ながら除雪を行いましょう。

◎車を運転している場合
●運転中に暴風雪となり視界が悪くなった時は、運転を続けることは危険であるため、道の駅など安全な場所に停車し、天気の回復を待ちましょう。また、気象情報や道路状況を確認しましょう。

車で立ち往生した場合

・後続車からの追突を防ぐため、ハザードランプを点滅させ、停止表示板を置きましょう。
・近くに避難できる場所や救助を求められる人がいない場合は、ロードサービスや警察・消防へ連絡し救助を求めましょう。

車内で救助を待つ場合の注意点

⚠ 原則エンジン停止

一酸化炭素中毒の危険をなくすにはエンジンを切ることが大切です。防寒着や毛布、新聞紙などで体温の低下を防ぎましょう。

⚠ エンジンをかける時は

暖房などのためにエンジンをかける時には、排気口（マフラー）の周囲を確実に除雪しましょう。

⚠ 一酸化炭素中毒の危険性

車が雪に埋もれた時にエンジンをかけ続けると排気ガスによる一酸化炭素中毒の危険性が生じます。埋もれ方が深いほど危険であり、窓を開けていても絶対安全とは言えません。
また、風向きや窓の開き具合などの条件によっては、窓を開けていても閉めているときより一酸化炭素中毒の危険性が高くなることもあります。

災害 -その他の災害-
落雷・竜巻

積乱雲が接近すると、竜巻や雷などが発生し大きな被害につながる可能性があります。積乱雲が近づく兆候に気がついたら、安全な場所へ避難しましょう。

積乱雲が近づくサイン

次のような現象が発生した場合は、安全な場所へ避難しましょう。

低く黒い雲が接近する

雷鳴や雷光が見える

冷たい風が吹く

強い雨やひょうが降る

竜巻が発生したら

竜巻の発生や接近に気がついたら、すぐに身を守るための行動をとりましょう。

◎屋外にいる場合

- 近くの頑丈な建物に避難
- 避難できる建物がない場合は物陰で身を守る
- 飛ばされるおそれのある車庫や物置、プレハブには避難しない

◎屋内にいる場合

- 1階の窓がない部屋に移動する
- 窓やカーテンを閉め、窓から離れる
- 机やテーブルの下で頭を守る

雷の音が聞こえたら

雷鳴が聞こえるなど雷雲が近づく様子がある時は、落雷の危険性があります。屋外にいる場合は、安全な場所へ避難しましょう。

◎安全な場所

- 建物の中、自動車やバスなど

※屋内にいる場合は、電気器具や天井、壁から1m以上離れましょう。

◎危険な場所

- ゴルフ場やキャンプ場、海岸などのひらけた平地
- 木の下や電柱のそば

※木や電柱のそばにいると、落ちた雷が飛び移る可能性があるため、4m以上は離れましょう。

避難ができない場合は

安全な場所へ避難できない場合は、両足をそろえ膝を折って姿勢を低くし、つま先立ちで地面との接地面を少なくしましょう。また、鼓膜を守るために両手で耳をふさぎましょう。

災害
冬の防災

帯広市は積雪寒冷地であり、真冬には−20℃を下回ることもあります。雪や寒さを考慮した冬の防災対策が必要となります。

雪への備え

屋根からの落雪により、玄関や窓がふさがってしまい、避難口が確保できない可能性があります。玄関前はもちろん、窓の周辺もこまめに除雪をしておきましょう。

屋根の雪下ろしは、転落事故のおそれがあるため、悪天候時は避け、命綱を着用のうえ、必ず複数人で作業するようにしましょう。

寒さへの備え

暴風雪や送電線への着雪により停電が発生する可能性があります。

帽子、手袋、ジャンパーなどの防寒具や停電時でも使用可能なポータブルストーブと燃料などを備えておきましょう。

冬に準備しておきたい非常持ち出し品リスト

- ☐ 防寒具（帽子、手袋、防寒着　など）
- ☐ 衣類（厚手の長袖、長ズボン、厚手の靴下　など）
- ☐ 電源を必要としない暖房器具、燃料
- ☐ 毛布・カイロ
- ☐ 防寒シート（アルミ）
- ☐ ヘルメット（防災頭巾）
- ☐ 食料、飲料水
- ☐ 携帯用ラジオ
- ☐ 懐中電灯
- ☐ 常備薬、持病の薬
- ☐ 救急袋
- ☐ マスク
- ☐ 簡易トイレ
- ☐ 現金、貴重品　など

車の備え

天気の急変などにより車が立ち往生することを想定して、防寒着、長靴、手袋、スコップ、けん引ロープなどを車に用意するとともに、十分に燃料があることを確認しましょう。

災害
武力攻撃やテロへの備え

武力攻撃やテロについて、どんな情報をどのように収集するか、警報が発令されたらどのような行動をとればよいかを理解して身の安全を守りましょう。

武力攻撃やテロについて

武力攻撃やテロなどの「国民保護事案」は、自然災害と同様に、いつ・どこで発生するかはわかりません。こうした事態が発生した場合も、「落ち着いた避難行動」と「正確な情報を素早く収集」することが大切です。

ミサイル発射情報が出された場合

屋内にいる場合

窓から離れるか、窓のない部屋に移動しましょう

- ドアや窓をすべて閉めましょう
- ガス、水道、換気扇を止めましょう

屋外にいる場合

近くの堅牢な建物や地下街など屋内に避難しましょう

- 車を運転している場合は、道路外の場所に駐車し、避難しましょう。やむを得ず道路に置いて避難するときは、道路の左側端に沿ってキーを付けたまま駐車するなど緊急通行車両の通行の妨げにならないようにしましょう。

建物がない場合

物陰に隠れるか、地面に伏せて頭を守りましょう

⚠ 国民保護事案に関することについてはこちらからご覧になれます

●国民保護ポータルサイト
武力攻撃やテロなどから身を守るために事前に確認しておきましょう
https://www.kokuminhogo.go.jp/

●首相官邸ホームページ
https://www.kantei.go.jp/

Twitterアカウント
●首相官邸災害・危機管理情報
@Kantei_Saigai

災害
避難時の感染症対策

避難先では、自分や家族以外の避難者と空間を共有することから、感染症がまん延しやすい状況になる可能性があります。各自で対策に努めて避難先での感染症に気をつけましょう。

感染症対策は常に心がけましょう

感染症が流行している時期は当然ですが、それ以外の時期であっても、災害時には体力や免疫力の低下、衛生状態の悪化などで感染症にかかりやすくなります。「自分がかからない」、「他人にうつさない」ことを常に心がけましょう。

自分の持ち物の中に、感染症対策用品も用意しましょう

災害時は帯広市の避難所のほか、親戚や知人宅、宿泊施設、車中避難などさまざまな避難先が考えられます。避難先に必ずしも十分な感染症対策用品があるとは限らないので、非常用の持ち出し品の中には、基本的な感染症対策用品を用意しておきましょう。

●マスク
マスクは数日分の用意があると安心です。マスクがない時には、鼻と口を覆うのにタオルや手ぬぐいがあると役立ちます。

●アルコール消毒液
こまめな手指消毒ができるよう、アルコール消毒液を用意しておきましょう。代替策として除菌効果のあるウエットティッシュも有効です。

●体温計
体調の変化をチェックできるよう、体温計も用意しましょう。

感染症に注意が必要な時期は、避難先に着く前から感染症対策を

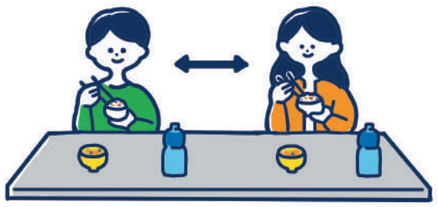
新型コロナウイルス感染症やインフルエンザなど、感染症に注意が必要な時期の避難では、避難先に到着する前からマスクを着用するなどの感染症対策をしましょう。

避難先には大勢の人が集まることがありますので、常に人との距離を意識して行動することが大切です。

「共用」する場面が多い避難生活では感染リスクも高まります

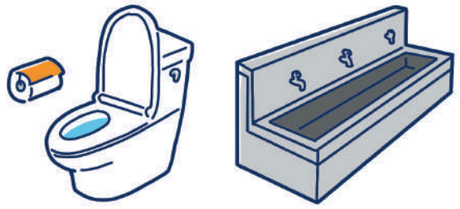
避難所には不特定多数の人が避難してきます。居住スペースに加えて食事や手洗い・水飲み場、トイレなど生活のさまざまな場面を「共用」する避難所では、感染症が広がるリスクも高まります。

避難所運営では、感染症対策に注意が必要な時期以外でも十分な注意を払いますが、避難した人もどこに感染リスクがあるかを考えて過ごしましょう。



食事は避難生活の緊張を緩和する時間ですが、他人の食事に飛沫が飛ばないよう、「向かい合わない」「距離をとる」など互いに配慮をしましょう。

多くの人の手が触れるドアノブや手すりなどに触れた後は、石鹸できれいに手を洗いましょう。



トイレや水回りの衛生状態が悪いと感染症のリスクは高まります。
清潔な状態が保たれるよう、清掃を行いますが、使う際にも極力汚さないよう、きれいに使用することを心がけることも大切です。また、洋式便器では、蓋を閉めてから流すことも感染症対策に有効です。

切り傷やすり傷は適切に処置しましょう

わずかな傷口からでも細菌などが侵入し、破傷風などの深刻な病気につながる可能性もあります。

「大した傷ではない」と油断せず、消毒や傷口を覆うなどの適切な処置を早めに行いましょう。

ばんそうこうやガーゼなどの非常用持ち出し品を用意しておくと安心です。

⚠ 自分に危険が迫った時はためらわないで避難を！ ⚠

「避難」とは「難」を「避ける」ことで、自分に迫る危険が「難」です。
感染症は、適切な対策をしっかり行えばリスクを下げることができますが、自然災害が発生した時は、身に迫る危険から遠ざかることが一番大切です。

避難が必要な時に避難先での感染症を気にして避難が遅れたり、ためらうことがないように、感染症対策の準備もしっかりと行った上で避難行動がとれるような準備をしておきましょう。

災害
避難生活での注意点

慣れない避難生活での健康を保つため、病気などの予防方法や知識を身につけましょう。

1 熱中症

熱中症は、気温や湿度が高い状況や、栄養補給が十分にできていないことなどにより、人の体がうまく体温調節できない場合に起こります。

避難所などでは、大勢の人が集まるため、特に、夏場には熱中症の危険性が高まります。

予防策

1 こまめな水分補給
2 通気性のよい衣服の着用
3 冷たいタオルで体を冷やす など

2 低体温症

低体温症は冬期間だけに限らず、体が濡れた状態が長時間続くと起こる場合もあります。

初期症状は、手足が冷たくなったり細かく震えたりするなど、寒い時の身体反応との区別がつきにくく、気付いた時には症状が悪化していることもあります。

予防策

1 雨などで衣類が濡れた場合はすぐに着替える
2 毛布などにくるまり体温を保つ
3 温かい食べ物と水分の補給 など

3 エコノミークラス症候群

食事や水分を十分に取らない状態で、狭い場所に長時間座ったまま足を動かさないと、血行不良が起こり血液が固まりやすくなります。

その結果、血の固まり（血栓）が血管の中を流れ、肺に詰まって肺寒栓などを誘発するおそれがあります。

予防策

1 こまめな水分補給
2 ときどき軽い体操やストレッチを行う
3 ゆったりとした服装とベルトをきつく締めない
4 かかとの上げ下ろし運動をしたりふくらはぎを軽く揉んだりする
5 眠る時は足を上げる など

4 生活不活発病

体を動かす機会が減ると、エコノミークラス症候群だけでなく、歩行困難や寝たきり、認知症などの症状につながる生活不活発病がおこりやすくなります。避難生活でも「無理は禁物」「安静第一」と思い込みすぎず、適度な運動を行うことが大切です。

災害 ペットの災害対策

災害時にペットを守るために、日頃からペットの災害対策をしておきましょう。

災害時のペットの備え

日頃からペットの非常用品を用意しておきましょう。
備蓄は、最低でも5日間分を目安としましょう。

ペット備蓄品チェックリスト

- ☐ フード、水（最低5日間分）
- ☐ 食器
- ☐ 予備の首輪、リード（伸びないもの）
- ☐ 療法食や薬
- ☐ ケージ
- ☐ トイレ、排泄物の処理用具
- ☐ ペットシーツ
- ☐ タオル、おもちゃ
- ☐ 飼い主の連絡先
- ☐ ワクチンの接種記録 など

ペットの避難について

災害時は、ペットと共に避難ができますが、避難所では避難者とは別の場所（屋外など）で飼い主が世話をすることになります。
ペットホテルや知人宅などの預け先も普段から考えておきましょう。

ペットの健康管理としつけ

避難所では、慣れない場所で大勢の人や見知らぬ動物と生活することになるので、ペットもストレスを感じ、体調を崩してしまう場合があります。
健康状態を保つため、普段からケージに慣れさせておくなどのしつけをしておきましょう。

健康管理・しつけチェックリスト

- ☐ 他の人や動物、声や音に慣らしておく
- ☐ ケージに入ることを嫌がらない
- ☐ 不必要に吠えない
- ☐ 「待て」や「伏せ」などの基本的なしつけ
- ☐ トイレに排泄ができる
- ☐ 予防接種・ワクチン接種
- ☐ ノミ・ダニなどの駆除

災害 もしもの時の応急手当

いつ、どこで、突然のけがや病気におそわれるかわかりません。家庭や職場などでの応急手当で、けがや病気の悪化を防ぐことができます。

けがなどの主な対処方法

◎大きなきず（出血など）

- 傷口が汚れている時は、なるべく早くきれいな水で十分に洗い流す。
- 出血が多い場合は、清潔なガーゼや布などで強く押さえて止血する。
- 骨折が無いことを確認した上で、傷口は心臓よりも高くする。
- 包帯を巻く時は患部を清潔に保つ。
- 血液に直接触れないよう、ビニールやゴム手袋などを利用する。

◎やけど

- 水（水道水などのきれいな流水）で痛みが和らぐまで10～20分程度十分に冷やす。
- 傷に強い水圧を当てないようにする。
- 衣服が皮膚についた時は、無理にはがさずそのまま冷やす。
- 冷やしたあとは、清潔なガーゼなどで覆う。
- やけどがひどい時は急いで医師の手当てを受ける。

◎骨折

- 出血している場合は、まず止血をする。
- 負傷した箇所は動かさないようにする。
- 氷あるいは冷湿布などを利用して腫れや痛みをやわらげる。
- 可能であれば、添え木※を当て、骨折部分を固定する。
  ※添え木は、棒や板、傘やダンボールなどで代用できます。
- 前腕や上腕部の骨折は、三角巾などを使って上下の関節が動かないように固定する。

◎病気による突然の心停止を防ぐために

急性心筋梗塞の主な症状

- 強くて止まない胸の痛み
- 胸が締め付けられる（重苦しさや圧迫感）
- 胸が焼け付くような感じがする

脳卒中の主な症状

- 左右のどちらか力が入らなくなる
- ろれつが回らなくなる
- 経験したことがないほどの強い頭痛
- しびれる
- ものが見えにくくなる

**このような症状がある場合は、すぐに119番通報をして救急車を呼んでください。
万が一、救急車が到着する前に反応がなくなり普段どおりの呼吸がない、または
その判断がつかない場合は、直ちに次のページの応急手当を行ってください。**

心肺蘇生とAED（自動体外式除細動器）

①心肺蘇生の重要性

人は心臓が突然止まると、脳に酸素が行かなくなり、約15秒以内に意識がなくなり、そのままの状態が3～4分以上続くと、心臓の動きが戻ったとしても後遺症が残るおそれがあります。

心肺蘇生法は、倒れている人の胸を押して心臓の役割を果たすことで、血液内の酸素を脳に送り届ける方法です。

倒れている人を発見し、反応も呼吸もなかったら、居合わせた人が速やかに救急車を呼び、迷わずに心肺蘇生を行うことが何よりも大切です。

②AED（自動体外式除細動器）とは

突然起こる心肺停止の中には、心臓が細かく震えている状態の時があり、その場合は心臓に電気ショックを与えて震えを取り除く（除細動）必要があります。

救命率は、電気ショックが1分遅れるごとに10％ずつ低下するため、居合わせた人がいち早くAEDを使用することが重要です。

AEDの使い方はとても簡単で、電源を入れた後は音声メッセージに従って操作するだけです。電気ショックが必要かどうかはAEDが判断します。AEDの操作と心肺蘇生を繰り返しながら救急車の到着を待ってください。

●心肺蘇生の流れ

STEP 1

①傷病者の発見

倒れている人を発見したら、反応を確認し、119番通報とAEDの用意をします。

STEP 2

②応急手当の実施

反応がなく（判断がつかない場合を含む）、普段どおりの呼吸がない場合は、胸骨圧迫（心臓マッサージ）を開始します。

STEP 3

③AEDの使用

AEDが到着したら電源を入れます。AEDの指示に従い安全を確認して電気ショックボタンを押します。

※STEP②と③を繰り返します。

●「おびひろ救命アシスト事業」協力施設

おびひろ救命アシスト事業協力施設（AEDを設置しており、応急手当ができる者が複数勤務している）は、とかち広域消防事務組合のホームページで確認できます。

●救命講習の開催

毎月9日、19日と第4日曜日に救命講習を開催しています。詳細はとかち広域消防事務組合のホームページをご覧いただくか、帯広消防署救急課までお問い合わせください。
TEL 0155-26-9132

防災関係機関及び緊急時の医療機関（救急告示病院）

防災関係機関

	施設名	住所	電話番号
1	駅前交番	西3条南12丁目8	23-5973
2	西五条交番	西5条南16丁目4-5	23-6289
3	西十七条交番	西17条北1丁目1-16	34-6170
4	柏林台交番	西16条南2丁目11-9	36-1789
5	西帯広交番	西23条南1丁目70-1	37-2009
6	大通交番	大通南21丁目6-1	23-4880
7	緑ヶ丘交番	緑ヶ丘東通東47-1	24-6221
8	新緑通交番	西22条南4丁目1-6	35-8251
9	稲田交番	稲田町南8線西14-33	47-0313
10	大空交番	大空町12丁目1-10	48-0555
11	東四条交番	東4条南9丁目19	23-7581
12	川西駐在所	川西町基線57-35	59-2300
13	大正駐在所	大正本町西1条2丁目1	64-5110
14	帯広消防署	西6条南6丁目3-1	26-9128
15	消防署東出張所	東7条南11丁目1-3	23-7346
16	消防署柏林台出張所	柏林台西町2丁目2	41-7177
17	消防署森の里出張所	西22条南4丁目1-3	35-0119
18	消防署南出張所	西17条南41丁目5-9	47-0436
19	消防署大正出張所	大正本町西1条1丁目2-3	64-5124
20	陸上自衛隊第4普通科連隊	南町南7線31	48-5121
21	帯広開発建設部	西5条南8丁目	24-4121
22	帯広測候所	東4条南9丁目2-1	24-4555
23	十勝総合振興局	東3条南3丁目	26-9005
24	帯広保健所	東3条南3丁目	27-8634
25	帯広建設管理部	東3条南3丁目	26-9005
26	帯広郵便局	西3条南8丁目10	0570-023-926
27	（株）NTT東日本北海道東支店	東3条南12-2	23-8920
28	北海道電力ネットワーク（株）帯広支店	西5条南7丁目2-1	24-5161
29	NHK帯広放送局	西5条南7丁目2-2	23-3111
30	帯広ガス（株）	西9条南8丁目5	24-4200

緊急時の医療機関（救急告示病院）

	施設名	住所	電話番号
1	帯広協会病院	東5条南9丁目2	22-6600
2	帯広中央病院	西7条南8丁目1-3	24-2200
3	帯広第一病院	西4条南15丁目17-3	25-3121
4	帯広厚生病院	西14条南10丁目1	65-0101
5	協立病院	西16条北1丁目27-5	35-3355
6	国立病院機構　帯広病院	西18条北2丁目16	33-3155
7	開西病院	西23条南2丁目16-27	38-7200
8	北斗病院	稲田町基線7-5	48-8000
9	十勝勤医協　帯広病院	西9条南12丁目4	21-4111

災害
被災から生活再建するまで

災害への対応は大きく、「予防」「応急対応」「復旧・復興」に分けられます。被災後、どのように生活再建していくかの流れも知っておくことが大切です。

災害発生 → ① 応急危険度判定 → ② 罹災証明書の交付 → ③ 各種保険の手続き

①応急危険度判定

二次的被害防止を目的に、地震により被災した建物に、余震などによる倒壊や落下物などの危険性がないかについて帯広市が判定します。「①危険（赤）」、「②要注意（黄色）」、「③調査済（緑）」の3段階で判定し、判定結果を貼紙で外壁などに貼ります。応急危険度判定は暫定的な被害調査であり、罹災証明ではありません。

応急危険度判定に関する問い合わせは
帯広市建築開発課
☎0155-65-4181 まで

●判定結果ステッカーについて

●この建築物に立ち入ることは危険です
●立ち入る場合は専門家に相談し、応急措置を行った後にしてください

●この建築物に入る場合は十分注意してください
●応急的に補強する場合には専門家にご相談ください

●この建築物の被災程度は小さいと考えられます
●建築物は使用可能です

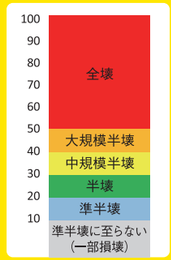
②罹災証明書の交付

被災者の各種支援策の適用の判断材料として使われるもので、住宅などの被害状況を帯広市が調査し、被害の程度を証明するものです。

罹災証明書交付までの流れ

① 相談（窓口・電話） → ② 罹災証明願の受理（窓口または郵送） → ③ 被害認定調査の実施 → ④ 罹災証明書の交付

③ 被害認定調査の実施：全壊・大規模半壊・中規模半壊・半壊・準半壊・準半壊に至らない（一部損壊）の6段階で認定



住家の被害認定調査、罹災証明書の交付に関することは **帯広市資産税課** ☎0155-65-4123 まで

③被害届出証明書について

帯広市では、被害の届出があったことを証明する「被害届出証明書」を交付しています。罹災証明書が発行されない被害の保険請求などのために必要な場合は申請することができます。

ポイント

①即日交付
罹災証明書と違い、現地確認はしません。

②被害の届出があったことの証明
被害があったことを証明するものではありませんので、あらかじめ提出先に被害届出証明書で問題がないか確認してから申請をお願いします。

被害届出証明書に関することは **帯広市危機対策課** ☎0155-65-4103 まで

④各種保険について

災害時に支払われる損害保険は、自助としての備えの1つです。

●すまいの保険（火災保険）で補償される風水災などによる被害（例）

- 風災：台風や暴風など
- 水災：洪水や床上浸水など
- 雪災：大雪やなだれなど
- 落雷

※地震・噴火またはこれらによる津波を原因とする損害は、地震保険で補償されます。

●地震保険の対象となるもの

対象：建物 ・・・ 住居のみに使用される建物及び併用住宅
　　：家財 ・・・ 30万円を超える貴金属や宝石などは含まれない

※地震保険は単独では加入できません。火災保険にセットで加入することが必要です。

	損害の状況			支払われる保険金
	建物		家財	
	基礎・柱・壁・屋根などの損害額が	焼失・流失した部分の床面積が	家財の損害額が	
全損	建物の時価の 50%以上	建物の延床面積の 70%以上	家財の時価の 80%以上	契約金額の 100%（時価が限度）
大半損	建物の時価の 40～50%未満	建物の延床面積の 50～70%未満	家財の時価の 60～80%未満	契約金額の 60%（時価の60%が限度）
小半損	建物の時価の 20～40%未満	建物の延床面積の 20～50%未満	家財の時価の 30～60%未満	契約金額の 30%（時価の30%が限度）
一部損	建物の時価の 3～20%未満	全損・大半損・小半損・一部損に至らない建物が 床上浸水（または地盤面から45cmを超える浸水）	家財の時価の 10～30%未満	契約金額の 5%（時価の5%が限度）

出典：「備えて安心地震保険の話（一般社団法人 日本損害保険協会）」

詳しくは、損害保険代理店または損害保険会社へお問い合わせください。